

近世初期俳諧集『西鶴五百韻』の用語「厄害」ヤツカイ

—「厄介」との関連性をめぐって—

田 中 巳 榮 子

はじめに

一六七三年処女俳諧集『生玉万句』を著し、古風な貞門俳諧を離れ、新しいことばと軽妙な表現を特質とする談林俳壇に登場したのが井原西鶴である。

『西鶴五百韻』⁽¹⁾(一六七八年)は、題名に「西鶴」とあっても西鶴独吟の俳諧集ではない。田中(二〇一四)⁽²⁾では、『西鶴五百韻』の漢語の和語化と当て字について述べたことはあるが、当該集九一番の

厄害ヤツカイをかけたてまつる町へ皆(九一 西鶴)

岩戸の前にて旧里キウリさらる、(九〇番 西六)

と西鶴が詠む「厄害」^{ヤツカイ}についての考察には至らなかつた。

現在では、「世話をする」「面倒をかける」意を表す「やっかい」

の漢字表記には、「厄介」を当て「厄害」を通用することはない。そこで本稿では、「厄介」は「厄害」を語源とするのではないかを問題点とし、両語の関連性を中心に、その周辺の語とともに検討を進めることにしたい。

以下用例資料における太線の傍線は稿者が付したものである。

一 「厄害」について

(一) 諸辞書における「厄害」

ア、『漢語大詞典』(巻一)の「厄害」の語釈には「危難禍害」とあり、「わざわい・厄難」を意味すると理解できる。用例には『易林』(六二年成立)から引用する「子畏於匡、厄困

陳蔡、德行不危、竟脱厄害」の記載がある。

イ、『大漢和辞典』では、「厄害」に「わざはひ」の語釈と、こでも「易林」〔渙之第五十九、坎〕から「明德不危、竟免厄害」の例を挙げる。

ウ、『日本国語大辞典』（第二版 小学館）『広辞苑』（一九九八年第五版 岩波書店）では、「厄害」の語釈に

やくがいが【厄害】厄難と災害。また、厄難にあつて害せられること。

と記す。『日本国語大辞典』では当項目での挙例ではなく、見出し語「厄介」の用例に、『西鶴大矢数』所収の「厄害（ヤツカイ）か浮世の繩に懸くる 昨日も三人けふも六人」の採録があり、この「厄害」は「厄介」と同意であることを示すものである。

エ、『童訓集』^③（寛文頃）には「厄害 やつかい」とあり、「厄介」に通じるヨミの収録がある。

（二）「厄害」の用例

① 『地藏菩薩靈驗記』^④（一五〇〇年後半）実睿・良観著
されば信心しんじんの者は得益影とくえきかげの如く随したがい厄害やくがい更にいた至ることなし。

（七六 小兒井に墮つるを夢中に救ひ給ふ事）

現段階の調査結果では、用例①が日本での初出例となり、以後どのような場面で使用しているか、「厄害」の用例を挙げて検討を加えていくことにしたい。

② 『吉田松陰書簡集』^⑤嘉永六（一六二九）年 横井平四郎宛
先般は尊藩罷出諸君え不^二容易^一御厄害罷成、忝謝此事に御座候。

③ 『西鶴大矢数』^⑥一六八〇年
ア、三人口に十五人まで（第一卷第四・七〇）

イ、泊り宿婦鴈の口につふやきて（第二卷第一三・三）
厄害やくがいか、るあし弱よわのくも（四） 豊秋

ウ、厄害やくがいか浮世の秋に掛りくる（第四卷第三五・九三）
昨日も三人けふも六人（九四）

『西鶴大矢数』の集中には、右の三句に「厄害」が見え、いずれも「迷惑をかける」「世話をする」意として用いられる。

前掲の当該集（九一番）の「厄害をかけたてまつる」の『西鶴連句注釈』^⑦の注には、「『こちらの不始末で、ご迷惑をお掛けいたしますが、』の意。」とあり、『西鶴大矢数』と同じ用法であると判断できる。

④ 『当世下手談義』^⑧（巻二）一七五二年 静観房好阿書

何の役にもたたず。また厄害にもならず。またあつてもなくとも。

⑤『頼山陽書翰集』一八一四年 三月六日

されども生計は油断不_レ仕、先々人に厄害を懸候ほどには不_レ至候、御安心可被下候。

上記の①②は「危急な事態」「わざわざい」などを「厄害」と云い、「迷惑をかける」「面倒をかける」意を表す③④⑤の「厄害」とは、意味的な相違がある。次の⑥から⑨には〈国立国会図書館デジタルコレクシヨン〉による用例を提示した。

⑥『大内町史 上巻』(一八六八年三月)

但今後総而士奉公人は不及申農商奉公人に至迄相抱候節は出処得と相糺可申 自然脱走のもの相抱不埒出来御厄害に立至り候節は其主人の落度たるべく候事

三月

太政官

⑦『仏国史』(一八七八年)

第六十篇 第十世ルウィーノ殂憲法「ルワー、サリック」ヲ用井ル猶太民常ニ厄害ニ遭フシヤル、ル、ベルノ傳花ヲ與ヘテ詩ヲ賞スル戯

(右の厄害以外の傍線と「」は資料に付されたものである)

⑧伊藤博文書簡 井上馨関係文書 一八七八年五月五日

末松より何も申上候事にて御了解被下候儀と奉遥察候。御屏朝之節甚御厄害之儀恐入候へ共、一事御願申上度、別紙尾崎三郎書中にて逐一ご承知可被下事と奉存候。

⑨伊藤博文書簡 伊東巳代治関係文書一八八五年五月二二日

再伸 蒙御厄害候棄兒も竟に引直し候事に取極置申候。就ては改名云々過日来香川よりも被勸候に付、為御一覽左の通本日不図思付の儘書記置申候。改捨郎為博雄。ステロは棄つるなり。ヒロラは拾ふなり。

⑩客舎「立ち所に身代を持ち崩し、一家一族の厄害容易ならず」

『横浜新誌』一八七七年 川井恵一

以上の⑥から⑨の四例は、一八〇〇年後半の明治の新政府の大事を記す文書や立て札・翻訳書『仏国史』・伊藤博文の書簡などであり、これらの「厄害」は、本来の「危ない目に遭うこと」「不幸な出来事」の意味をあらわす語として用いられる。⑩もまた、一家一族に「わざわざ」をもたらされたと解することができる、ここまでは③西鶴の俳諧④『当世下手談義』⑤「頼山陽書翰」が「厄介」と同義語として用いられていることになる。

(三) 「厄害」の類義語の存在

では、日本では『地藏菩薩靈驗記』以前では「厄害」に準じ

る語として、どのような用語を使用したかを考えてみると、「災難」「厄難」などの類義語があり、例えば、八二二年成立とする『日本霊異記』には、不慮の出来事に「災難」を用いる三件の例がある。

● 「災難」

① 『日本霊異記』 八二二年

ア、若平還來、爲諸神祇造立伽藍。遂免災難。

上・縁第七

イ、山繼爲征人、賊地毛人打所遣、廻賊地之頃、彼妻爲

令脱賊難、作觀音木像、慇懃敬供。免夫災難、自賊

地還來、發歎喜心、與妻相禮。

下・縁第七

ウ、二人無知、唯稱誦南無々量災難令解脱、尺迦牟尼佛、

哭叫不_レ息。

下・縁二五

右の_レアでは、無事な帰還を阻む出来事、イでは賊難に遭うことを災難と云い、『大漢和辞典』が引用する「明德_不危、竟免_二厄害_一」(易林、渙之第五十九、坎)と類似する構文である。ウもまた、大海に漂流する大変な情景を災難と表現することから、ア・イ・ウ三例のいずれも「災難」を「厄害」に置き換えることも可能ではあるだろう。

因みに〈平安遺文フルテキストデータベース〉の検索結果で

は、「災難」に一九件、〈撰関期古記録データベース〉では『春記』(一〇三八年―一〇四一年)に「国家の災難」が三件、「災難を蒙る」一件の四件や「高山寺文書」(九三二年)の用例がある。

加えて、〈鎌倉遺文フルテキストデータベース〉では、『東大寺文書』(二二〇五年―二月)の「災難ヲ百由旬ノ外ニ掃ヒ、」_二天下の災難_一「国土災難之根元」(筑前宗像神社文書、「災難忽止了」(日蓮聖人遺文)など五五件の検索結果を得たが、以上のデータベースでは「厄害」の用例を見つけることは出来なかった。また、『古續記』文永八(一二七一年)九月廿一日には「永劫災難」と記す用例があり、時代が下って明治期の用例の一つには

⑫ 思はぬ災難に出會ひ非常に困難をしました (九五頁)

『芳語櫻と薔薇』一八八七年 共隆社

と不慮の嫌疑をかけられたことを「災難」といい、「災難」は古代から現代まで途切れることなく、汎用されていたことは推察することが出来る。

● 「厄難」

一方「厄難」は、『漢語大詞典』では「厄難」の語釈に「禍難」、「大漢和辞典」では「わざはひ・なんぎ」とあり、「厄害」と同様の語釈が見え、前掲の『日本霊異記』では「災難」と同時に、

次のような「厄難」の用例がある。

⑬大丈夫論云、悲心施一人、功德大如レ地、爲レ己施一切、得レ報如二芥子、救二厄難人、勝二餘一切施」

『日本靈異記』上（縁第二九）

また〈平安遺文フルテキストデータベース〉の検索結果では、⑭新羅賊畔、越彼厄難平達聖境、是則聖力所能也、

「常暁和尚請来目錄」^⑭（八三九年九月二日）

と見え、平安初期の「大藏経」の経文には、「宮中姪女。百官。黎庶為病所苦。及余厄難。亦応造立五色神幡。然燈。」とある。これら⑬の『日本靈異記』の「大丈夫論」の引用文中に見えること、併せて⑭の「常暁和尚請来目錄」や「大藏経」に見えることなどを勘案して、古くには仏典関係に多用されていることが看取出来る。

⑮九厄トハ諸ノ厄難ヲソク事也、凡此三種ノ神符ヲ造テカク
レハ 『東鑑』^⑮ 建長五年五月小

（鎌倉遺文フルテキストデータベース）では、右の⑮と同時に一二二七年から一三〇九年にかけて、民経記寛喜三年五月巻裏文書・大和西大寺叡尊像納入文書・伏見宮家文書・後鳥羽院御靈託記などに使用例がある。

さらに時代が下って、⑯の『日本霊と蕃薇』には三件の使用例

があり、次の⑯は仲間がローズを失脚させようと企てていることを「厄難」という。

⑯密話を聞いてローズ身の厄難を前知す（九四頁）

『日本霊と蕃薇』第十回の表題 一八八七年 共隆社
⑰それは。左母二郎に殺された。信乃の許嫁の濱路の靈魂が此娘に憑りつた、めで。爰に不思議な再會をすることは出来たが。これについて種々な厄難が生り。

⑱二十四 重圍に陥るペートル畢生の厄難
『西語史 第九冊 ペートル大帝』一九一八年 博文館

⑲人事趣味の句が全く影をひそめたことを「俳諧の厄難」だと嘆じてゐる。

『川柳と俳諧』（俳諧の厄難）前田雀郎 一九三六年 交蘭社
⑰では信乃の父が非業の死を遂げたことや信乃が冤罪をなすりつけられたこと、⑱では糧食を奪おうとして失敗に終わったこと、⑲では幽寂高尚のみを心掛け、真の俳諧を忘れているのを「厄難」という。以上の「災難」と「厄難」を比較してみると、「災難」は使用範囲が広く、多岐に亘る使用例があると共に、無限に広がる「天」、或は「国家」のように、大きな集団に降りかかるわざわざい使用例があるのに比して、「厄難」は「天の厄難」

「国家の厄難」というのではなく、個人に起る出来事に用いる傾向があり、「厄難」の方が「厄害」に近い感がある。

では、西鶴は何を参考として「やっかい」に「厄害」を当てたのか。西鶴の用字法について、杉本つとむ(一九八二)は、「西鶴作品にみられる漢語・異体・略体の漢字が、宋・元以来の中国小説のそれと一致するものが多い」「西鶴の場合は愛読書とどうか、ある特定のものによつたらしいことは推測される。」(二六〇頁―二六一頁)と述べる。

また、『井原西鶴集一』の解説「出版技術の確立」には

慶長・元和ごろの刊本は、官版でなければ篤志家の私家版で、貴族や社寺の書庫に秘蔵されていた和歌の古典は、解放されることになつたのである。(二三頁)

と記され、近世には商業出版の隆盛に伴い、前掲の『地藏菩薩靈驗記』(一六世紀後半)に例が見えること、『童訓集』が一六七二年に出版されていること、さらに六二年成立一六二六年辺りに一六巻本になつたとする『易林』(焦氏易林)の存在など、これらを西鶴が見た可能性は考えられるだろう。

二 「厄会」から「厄介」へ

「厄介」と「厄会」の関係では、「厄介」は『厄会』の変化したものか「厄会(ヤククワイ)〔厄難會集ノ略〕ノ訛カ」と記載がある辞書があり、これらの記述を踏まえて、「厄介」と「厄会」の関連性に注目して、それぞれの辞書における記載、並びにいくつかの用例を次に提示して検討を試みていきたい。

(一) 辞書類における「厄会」と「厄介」

● 「厄会」

ア、『漢語大詞典』…【厄會】「众突会合。犹言厄运。」とあり、用例には『文選』にある班彪の〈王命論〉「故雖遭罹厄會竊其權柄」を引く。

イ、『大漢和辞典』…【厄會】「わざはひのめぐりあはせ」とあり、用例に『漢語大詞典』と同じ〈王命論〉の採録がある。

ウ、『色葉字類抄』…厄會ヤククワイ

(黒川本 中八七オ・ウ)(二一七七一―八一年)

エ、『塵芥』…厄會 ヤククワイ(屋部態芸芸)

清原宣賢 一五一〇年以後の成立

オ、『日本国語大辞典』…やつかいヤツカクワ 【厄会】わざわいのめぐりあわせ。 (第二版 小学館)

カ、『角川古語大辞典』…【厄會】やくくわいヤツカイ 漢語。災いに巡り合うこと。厄年(ヤツ) などについてもいう。 (一九八二年 角川書店)

● 「厄介」

ア、『大漢和辞典』…【厄介】カチ ①他人の厄難を助ける。②めんどう。めいわく。③邪魔。④世話。⑤寄食

イ、『書言字考節用集』(一七一七年)…

ヤクナシヤクカクイ
厄難厄介(今)按ニ宜用ニ厄會ノ字ヲ乎(今)

ウ、『俳字節用集』(一八二三年)…厄介ヤツカイかならずや

エ、『言海』…やくかい「役介」「厄介」他ノ厄難ヲ助クル」。世話。介抱。扶持

(稿本日本解書言海 第三卷) 一九七九年 大修館書店

因みに、『大言海』(富山房)には「(一)災厄トシテ、人ヲ介抱スルコト。(二)轉ジテ、手數ノ掛カルコト。」などがある。

オ、『日本国語大辞典』…やつかい【厄介】には「厄會」の变化したものか。一説『家居(やかい)の意とも』と記載があり、「面倒をみること。世話をすること。また、他の面

倒や世話を受けること。」などの語釈がある。

カ、『江戸時代用語考証事典』(一九八四年 新人物往来社)…

やつかい(養介、厄介) 他人の厄難を援ける意より、転

じて、①世話。面倒②養介人。出居衆と同じ。居候

ともいう。…(以下略)…

では、「厄介」は「厄會」の変化したものであるのか、用例を検証することにより、両者は同語として理解することが出来るかに視点を置いて検討していくことにしたい。

(二) 「厄會」「厄介」の用例

● 「厄會」

②0 縦雖ニ理運之厄會一 毛。轉レ厄ハ神之所レ掌祭

『扶桑略記』¹⁹⁾第三十 一〇七三年

②1 我本朝ハ神國祭、厄會を轉シ、病患ヲ除給、偏厚キ御助、廣キ御

恵ニ可在と所念行リ、故是以吉日良辰を擇定、官位姓名手差使

禮代乃御幣手奉出給布、掛畏キ大神、此状手平久安久聞食天縦依理

運天可来らむ厄會也、必其厄を轉シ、縦依答崇所致乃病憫也、

必其崇手拂天、 『白河上皇懼魚御告文』²⁰⁾一〇九〇年

②2 爰に今年の庚寅(≡天永元年)、歲厄會に当る。五月庚戌、替せぬ奎婁手に見え、長星の妖を示す。

『六藏寺本江都督納言願文集・一』一一一〇年

⑳㉑の例文では苦難にあうことを「厄會」といい、㉒では「厄年」を意味するものである。

㉓やくかい厄會ヤツカヒ者 俗語にやくかいになるといひ字を厄介と書り：(王命論)省略)：云々と見えて罹厄會とは厄難の會集せる時に罹レ也されば今俗にヤツカイニ預ルヤツカイニ成ルヤツカイ者などいふには義別也按にヤツカイは家抱ヤカヒにてヤカ、へと云を訛れる辭ときこゆさてはヤツカヒと書べし其家ヤカにか、づらひて介抱せらるゝよし也

『松屋筆記(卷之九一) 一九〇八年 五三四頁
ここでは、家抱ヤカヒが訛つたのが「やつかい」であるといい、「厄會」と「厄介」は異義語であるとする。

㉔今霎時しほの程にこそ。又厄會わいくになるべけれ

『八犬伝』(四・三五) 一八一四―一八四二年
㉔の「厄會」は「世話になる」と解し、「厄介」と同意と想定できる。「厄會」について、佐藤喜代治(一九九八)の『鎌倉遺文』の用字用語㉔では次の様に述べる。

関白藤原家実告(三二―一七三二)に、
身上爾可レ来 不祥厄會厄會。未爾萌攘却給比。
とあり、同様の文句が後堀河天皇宣命(六一―三九五五)に

も見える。藤原道家願文(七―四八二八)にも、

厄會手未兆未爾兆拂比。各徵手不日不日爾退介給事者。大明神乃厚御。
御患美。

とある。宣命体の告文などでは「厄會」が慣用語であったと考えられる。(三九頁)

続いて、『書言字考節用集』にある記述を取り上げ、「厄會」の意味が変化するに伴って、『厄介』と書くに至ったことが考えられる」と云い、西鶴の『大矢数』や頼山陽の書簡には「やつかい」を「厄害」と記す例があるとの指摘がある。(四〇頁)

●仮名書き「やつかい」

仮名書き「やつかい」は、漢字表記「厄介」より早く、次の『多聞院日記』が初出例となり、以後近世には、多くの用例が見える。

㉕畑ノ親類衆やつかいのよし歎間為合力也、不弁之由、勿論々々

『多聞院日記』(二五八二年三月九日)
㉖うつり瘡やみぬるうちほどのかうの(六一三)
いかいやつかいかくるゆの山(六一四 由平)

『大坂独吟集』下 一六七五年

㉗は世話をかけること、㉘は大層な迷惑をかけたことを「いかいやつかい」と詠み、『大坂独吟集』と同じ年の『談林十百韻』(三二番)には「多りうすき衣かたしくす浪人 住持のや

つかい小菫の月（正友）と詠む句があり、寺に転がり込んできた素浪人の世話をするを「やっかい」という。

⑲さまぐのおもひ事とても叶はぬに無用の佛神を祈り、やっかいを掛ける。『好色五人女』巻一・四 一六八六年

『好色五人女』の作者は西鶴とする説が有力であり、当該集九一番と同じく「やっかい」は手数をかけることを意味するものである。「蕪村書簡」では一七七六年から一七八三年の書簡に次の⑳を含め九通の仮名書き「やっかい（ひ）」の使用例があり、いずれも世話になった相手への感謝の気持ちを表現する文面に用いられている。

⑳魚尺画料御控へもたせ被遣、御やつかひの御事、慥落手忝存候。『蕪村書簡』一七七六年九月一七日

●「厄介」の用例

㉑次男三男厄介并御目見以下上下之もの、御徒迄罷出候事

『徳川禁令考』(第四帙・巻三六・文武) 一七九一年
⑳十三歳くらいよりは、我が身をひとの厄介にならぬようもて、

手習いなどとして、人並みに書くことをすべし。

『夢酔独言』勝小吉著 一八四三年
㉒私も數年来御厄介になつて碌々御恩も報ぜずを得ざる場合とは申しながらお目にも懸らずお店を出たは今日に致る迄決

して快く思つては居りませんが。

『日本櫻と薔薇』(二三八頁) 一八八七年
㉓さう云ふ人があれば固より願ふ所御厄介でも早速御周旋を

『日本櫻と薔薇』(一四一頁) 一八八七年
『前知す』中の会話文⑳では、「思はぬ災難に出會ひ」と不慮の嫌疑をかけられたことを「災難」といい、「厄介」の用例㉑では「お世話になつて」、㉒では「面倒でも」の意をあらわし、「厄介」は「災難」「厄難」とは意味内容に相違がある。

そもそも今回の調査結果では、「やっかい」の初出例が『多聞院日記』(一五八二年三月九日)の仮名書きである。室町期の『節用集』六種(伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本)には、「厄難」「災難」は収録されているものもあるが、「厄害」「厄会」「厄介」などの収録は見られず、前掲の『書言字考節用集』「厄難厄介(今宜用厄會字乎)」が漢字表記「厄介」の初出例となる。

佐藤喜代治(一九七二)『国語語彙の歴史的研究』(頼山陽の書簡に見える漢語について)では、「今普通に『厄介』と書く語を山陽の書簡では『厄害』と書いてゐる」と云い、続いて次のように述べる。

「厄介」は「書言字考節用集」には「今按宜用「厄会字」乎」と述べ、「文選」の例を挙げてゐるが、妥当とも思はれない。かへつて「厄害」といふ字が本来の書き方とも思はれる。「害」は漢音カイであり、「易林」に「竟脱「厄害。」といふ例がある。なほ研究を要する。

『国語語彙の歴史的研究』⁽³²⁾ 二六七―二六八頁
ここでは、「厄介」は「厄害」が本来の書き方とあるが、上述の後の佐藤（二九九八）では「厄会」の意味変化したものの言及がある。

前掲の『書言字考節用集』を「厄介」の漢字表記の始まりとして、漢字「厄介」が定着するまでには、当該集の「厄害」を初め、様々な漢字を当てることは当然の成り行きだったのだろう。それらの当て字表記を次に紹介することにした。

● 「厄介」の当て字
『西鶴大矢数注釈』⁽³³⁾（一九八六―八七年 前田金五郎）の「第一巻第四」の「厄害」^{ヤツカイ}の語注には、当て字として「養介」^{ヤウカイ}（本朝二十不孝・一の三）「養介」^{ヤウカイ}（本朝二十不孝・三の二）「役介」^{ヤクカイ}（反故集・志不可起）などを挙げ、「厄害」も慣用字の一種だとことと明白」とある。近世は識字層が広がったこと、俗語を用いる作品が多いことと相まって、「やっかい」には、「養介」「役介」

以外にも、「約介」「役害」「疫介」「厄界」など、様々な漢字表記があり、それらの例を次に提示することにする。

③③ 俳諧の辞書

ア、「世話字尽」（一六八一年）…疫介（ヤ61―4）
イ、「常陸帯」（二六九一年）…役害（ヒー言27―オ）
ウ、「反故集」（二六九六年）…役介 ヤツカイ

③④ 俗語の辞書

『志不可起』⁽³⁵⁾（巻五）（一七二七年）

やっかい 厄害ト書ヨシ也。又役介トモ見ヘタリ。

ここでは、「やっかい」を「厄害」と記すことがあるとの記述がある。

③⑤ 御年貢の皆済が出来ないで毎度庄屋に役害（ヤツカイ）かける
浄瑠璃・「嫩榕葉相生源氏」⁽³⁶⁾ 五一七七三年

③⑥ 離れがたき客にはかれにびらつき見せてあなたよりのく手立をこしらへ、知音減じて後約介をかくれば難題をいひて離別

す 『色道大鏡』⁽³⁷⁾（第十八 大偽品）一六七八年

③⑦ 親達の養介にはならじと、忍て庵を立退、行方知らず成ぬ。

『本朝二十不孝』⁽³⁸⁾（一六八六年）三の一同書（一の三）にも「親に養介を懸て撫育しに」と見え、これら「養介」の二例は文面から意味を理解することは出来ても

「やっかい」と読むには振り仮名を必要とする。『本朝二十不孝』ではその振り仮名の表記に「やっかい」「やくかい」と差異があるが「やっかい」のことは知っていれば、二語を同意として受け止めることが出来、読解に問題は生じないだろう。

また、『邇言便蒙抄』⁽³⁸⁾には「養介 ヤシナイタスクル」と収録があり、振り仮名の仮名表記に異同はあるものの、「やっかい」と同じと捉え、『本朝二十不孝』と同様に「やっかい」の意味領域の中で、何に関する「やっかい」であるのか、それを限定するのが「養」の漢字表記であり、漢字とヨミの不具合を補正するのが振り仮名である。

③⑧ ナント 役戒坊、きさま髪はどこでゆふぞいの

『東海道中膝栗毛』⁽⁴⁰⁾（七・下） 一八〇二—一八〇九年

『日本国語大辞典』の「役戒坊」には「やっかいもの（厄介者）と同じ」とあり、登場する出家した二人を僧名らしく役戒坊・持戒坊と名付け、厄介者という意味を込めた当て字である。

③⑨ 貧乏しても、こんな衆の瘦介もつけへにやアならねへ。

『浮世風呂』⁽⁴¹⁾（二・下） 一八〇九—一八二三年

④⑩ 御當所日本橋は人形町、通よ、赤煉瓦の學校裏、紋床に役介になつて居る下刺の愛吉てえ、しがねえものよ。

『三枚鱧』⁽⁴²⁾（十二） 泉鏡花 一九〇一年

同書「十八」にも「床屋の役介者―まあ然うして置けよ―役介者を煽がうといふ當世に」の用例があり、「四十七」には「内には妹と厄介な叔母とが居て」と「厄介」を用いる例が見える。この同作品に見える「役介」と「厄介」の使い分けを見ると「役」には「つとめ・しごと」を表す意があり、「つとめ」に関する「やっかい」では「役介」と表記し、単に「手数の懸る人」を意味する場面では「厄介」を用いると捉えることができる。

④⑪ 何の縁でお親子三人、千葉のお宅の厄界になるもふしぎなことがらお米なり

*頭注に「厄界」は「厄介のあて字」とある。

『春色梅児誉美』⁽⁴³⁾四編・一—二一 一八三二年

近世の仮名の多表記については、屋名池誠（二〇一一）に言語と表記の対応関係を様々な観点から分類し、その一つに「意味との関わりによる分類」として、表音表記（意味とは音形を介して間接的に関わるのみ）、表意性表記（音形と意味とを表示）があり、意味しか表示しないものは文字ではないと述べる一文がある。⁽⁴⁴⁾

上記のような多種の「厄介」の異表記では、中には漢字一字と音にズレがある、或は文面を離れては意味をなさない表記がある。それらは、漢字に振り仮名を付してことばの音構成に対

応させ、漢字一字一字に何らかの意味を持たせて、音形と意味とを表示する手法を採る結果の漢字表記なのである。

木村義之(二〇〇五)は

あて字は日本語表記の複雑さを語るのに象徴的な存在である。そこにあて字のおもしろさも難解さもあり、あて字とは何か、という定義と分類もやっかいなものとなっている。

『朝倉漢字講座Ⅰ 漢字と日本語』八〇頁
といい、あて字の分類には〈観察的立場〉と〈主体的立場〉があり、前者は〈読み手の立場〉後者は〈書き手の立場〉ともいえる⁽⁴⁵⁾。

用字の変化については、乾善彦(二〇〇三)『漢字による日本語書記の史的研究』(第五章第一節)に、日本的漢字の用字の変化に関して、「充てる」から「宛てる」への変化は、目的性をもつ「誤用からの創製」と述べる一節がある⁽⁴⁶⁾。「厄介」の場合は、災いを被った人を助ける意として、「厄害」「厄会」を使うには意味内容に問題が生じ、仮名書き「やっかい」が登場した結果、字義と語義とを合致させる日本独特の漢字表記として成立したのが「厄介」であると捉え、これも一種の目的性をもつ創製であると云えるだろう。

以上見てきたように、「厄介」は、『漢語大詞典』で「艱難困

苦に遭遇すること」を意味する「厄会」に通じる側面があると同時に、程度差はあるが人に影響を与える観点からは、「厄害」にも通じる一面がある。『日本国語大辞典』の「やっかい」「厄介」の項には次の三つの語源説があるものの、「厄害」との関連についての言及はない。

(1)ヤカキ(家居)の義(国語の将来Ⅱ柳田国男)

(2)ヤカカへの訛りで、ヤカカヒ(家抱)の義(松屋筆記)

(3)厄難会集の略ヤククワイ(厄会)の訛りか、またはヤカカへ(家抱)の約転か(大言海)

まず、「厄会(ヤククワイ)」との関連性を考えてみると、「会」の合拗音「クワイ」は『⁽⁴⁷⁾講談 日本語5 音韻』に、音韻消滅のよきな変化は絶えず行われているとあり、カ行合拗音の衰退も、「中世末期頃の現象と見なされる」(二四五頁)と記される。その室町時代の实例として、『山科家礼記』応仁二年の「カンノウ(勸農)、同書文明九年の「まんかん(満願)」、さらに、文明年間の『三体詩抄』に見える「観音」を取り上げ、「京都でも下層社会に直音化の傾向が強かったかと思われる」との記述がある。従って、すでに室町時代に实例があることから、初出例『多聞院日記』の「やっかい」は「厄会(やくくわい)」から音韻変化した語と認めることができる。「家居(ヤカキ)」に

ついでには『柳田國男全集22』（国語の将来¹⁸）に「ヤツカイという語は家と居との組合せで、本来はただ同居人ということであつた。これを公文に必ず厄介と書くことになつて」（二六九頁）とあり、「厄介」は「宛字」と記されている。

また、前掲の用例²³『松屋筆記』では「やつかい」は「家抱」の義とある。それならば、何故「家居」或は「家抱」の漢字表記が定着しなかつたのが問題点として残る。音韻変化には合拗音の退化と併せて一二世紀初めには促音「ツ」が見え、表記上「やくくわい」と直音表記「やつかい」の相違は時代的な変容によるものと捉え、時代の流れに沿つた必然の結果であると云える。

さらに、「厄害」の濁音「害（がい）」と清音「介・会」については、『大漢和辞典』の「害」の字音に「カイ」「ガイ」「カツ」「ガチ」とあり、漢音「カイ」の反切には「〔集韻〕下蓋切」とある。このことから「厄害」の「害」を清音「カイ」と発音すること、また、「やくかい」が促音化して「やつかい」とするのも理解でき、なんら不思議はない。そこで、「厄害」↓「厄会」↓「厄介」のような「厄会」が「厄害」に取って代わり、「厄介」が「厄会」に取って代わるという道筋を考えると、「害」と「介」は前者が「害する」、後者が「助ける」と相反する字義を

もつこと、「厄介」の成立後も「わざわざ・災難」を意味する「厄害」の用例が見えることなどから「厄介」が「厄害」に取って代わつたとは考え難い。一方「厄会」に関しては、

ア、室町期以降の「厄会」の用例は少なく、用例²⁴の『八犬伝』では「厄介」の意として使われている。

イ、佐藤（一九九八）には、前説（一九七二）を改め、「厄介」は「厄会」の変化したものかとある。

ウ、『語源辞典』（東京堂）の形容詞編（二〇〇〇年 吉田金彦）では、「厄介」は「漢語『厄会』の転であろう。災いのめぐり会わせを言ったのが起り」とあり、名詞編（二〇〇三年 草川昇）では「『厄介』はヤククワイ（厄会）の訛りか」とある。これらの見解と、上述の音韻変化を基に考えると、「厄会」の意味変化により定着した漢字表記語が、「厄介」であるとするのが最も妥当ではないだろうか。

終わりに

以上、辞書類に「厄害」を求めた結果では、『漢語大辞典』『大漢和辞典』では『易林』の例を引くものの、日本における用例では、一六世紀の『地藏菩薩靈驗記』が初出例となり、それ以

前の空白を埋めることは出来なかった。

「厄害」と「厄介」の関係については、『日本国語大辞典』並びに『広辞苑』に「厄害」が立項されているのを考えると、「厄害」と「厄介」とは別語である。

それならば、「厄介」の源流をどこに求めるか。「厄介」には「厄介な事」のような用法があり、「厄害」「厄会」を含めた三語は、「わざわざいする」点では同じ範疇にある。しかし、「やっかい」に「厄害」「厄会」を対応させるのには、用例に見るように意味的な側面からは少々不都合な点もある。

そこで、「わざわざい」の意を持つ「厄」と、「助ける」意を持つ「介」を複合させて、「厄害」の影響を受けながら「厄会」の意味変化により創製された日本特有の漢字表記語が「厄介」と云えるのである。

〔注〕

(1) 『西鶴五百韻』(『近世文学資料類従』古俳諧編30

一九七六年 勉誠社)

(2) 田中(二〇一四) 関西大学『東西学術研究所紀要』四七

輯、後二〇一八年『近世初期俳諧の表記に関する研究』(第

二章第四節) 和泉書院

(3) 『童訓集』刊行年の明らかな最古本は一六七二年(往來物大系 第一五卷 一九九三年 大空社)

(4) 『地藏菩薩靈驗記』一九三八年 藤井佐兵衛

(5) 『吉田松陰書簡集』一九三七年 岩波書店

(6) 『西鶴大矢数』(『近世文学資料類従』古俳諧編31)

一九七五年 勉誠社)

(7) 『西鶴連句注釈』前田金五郎著 二〇〇三年 勉誠出版

(8) 『当世下手談義』(巻二) 静観房好阿書 一七五二年 東

都書林

(9) 『頼山陽書翰集』一九二七年 民友社

(10) 『横浜新誌』川井景一 一八七七年(『日本国語大辞典』

の用例文をそのまま引用した。)

(11) 『日本霊異記』日本古典全書 一九七一年 朝日新聞社

(12) 『吉續記』(史料大成23) 一九三五年 内外書籍

(13) 『^{日本語}櫻と薔薇』一八八七年 共隆社(国立国会図書館デ

ジタルコレクション)による。

(14) 『常暁和尚請来目録』『大日本仏教全書』一九一四年 仏

書刊行会

(15) 『新刊吾妻鏡』(『東鑑』巻第四三) 国立国会図書館デジ
タルコレクション(跋文には「慶長十(一六〇五)年 前龍

山見鹿苑承兌叟」の識語がある。

- (16) 杉本つとむ『西鶴語彙管見』一九八二年 ひたく書房
- (17) 『井原西鶴全集 一』(日本古典文学全集 一九八二年 第三版 小学館)
- (18) 『塵芥』京都大学文学部国語学国文学研究室 一九七二年 臨川書店
- (19) 『扶桑略記』(『国史大系 第六卷』一九七七年 経済雑誌社)
- (20) 『白河上皇懼魚御告文』(『大日本古文書』家わけ四田 中家文書 一九〇九—一五年 東京帝国大学)
- (21) 『六藏寺本江都督納言願文集』(『角川古語大辞典』の見出し語「厄会」の挙例を引用した。)
- (22) 『松屋筆記』一九〇八年 国書刊行会
- (23) 『八犬伝』(『南総里見八犬伝』(二) 曲亭馬琴著 一九八四年 岩波書店)
- (24) 佐藤喜代治『漢語漢字の研究』一九九八年 明治書院
- (25) 『多聞院日記 三』(『増補続史料大成』第四十巻 一九七八年 臨川書店)
- (26) 『初期俳諧集』新日本古典文学大系 一九九一年 岩波書店
- (27) (26) と同じ
- (28) 『好色五人女』『近世文学資料類従 西鶴編4』(一九七五年 勉誠社) 解説には「序文・跋文もなく、署名・印記もない。けれどもこの作品を貫いている精神と詩情とは、西鶴独自のものであり、彼と同時代のどの作家にも見出すことのできない新しさとしさを持つてゐる。だから、世に西鶴の作ではないとする説もないわけではないが、にわかに従うことはできない。」(五一頁) と記される。
- (29) 『蕪村集 全』(『古典俳文学大系』一二巻 一九七二年 集英社)
- (30) 『司法省蔵版 徳川禁令考』一八九五年 司法省庶務課
- (31) 『夢酔独言』勝小吉著 二〇〇三年 教育出版
- (32) 佐藤喜代治『国語語彙の歴史的研究』一九七一年 明治書院
- (33) 『西鶴大矢数注釈』前田金五郎 一九八六年—八七年 勉誠社
- (34) 『近世文学資料類従 続無名抄他 古俳諧編47』一九七六年 勉誠社
- (35) 『志不可起』(『近世文学資料類従 参考文献編7』一九七六年 勉誠社)

(36) 『嫩榕葉相生源氏』近松門左衛門 一七七三年 (『日本国語大辞典』の子見出し「やっかいをかける」の挙例を引用した。)

(37) 『色道大鏡』野間光辰解題 一九七四年 八木書店

(38) 『近世文学資料類従 西鶴編6』一九七五年 勉誠社

(39) 『邇言便蒙抄』(『邇言便蒙抄の研究』一九七五年 杉本つとむ編 文化書房博文社)

(40) 『東海道中膝栗毛』十返舎一九 一八〇二年—〇九年

(『日本古典文学大系』一九五八年 岩波書店)

(41) 『浮世風呂』式亭三馬 一八〇九—一八二二年 (『新日本古典文学大系』一九八九年 岩波書店)

(42) 『三枚續』泉鏡太郎 一九〇一年 (『鏡花全集 卷六』

一九七四年第二版 岩波書店)

(43) 『春色梅児誉美』一八三二年 (『日本古典文学大系』一九六七年 岩波書店)

(44) 屋名池誠「近世通行仮名表記」—「濫れた表記」の宛を雪ぐ (『近世語研究のパスベクテイブ—言語文化をどう捉えるか』二〇一一年 笠間書院)

(45) 木村義之「あて字」(『朝倉漢字講座1 漢字と日本語』二〇〇五年 朝倉書店)

(46) 乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』二〇〇三年 塙書房 (三七三—三九一頁)

(47) 『^{講義}新編日本語5 音韻』一九九二年第三版 岩波書店

(48) 『柳田國男全集22』一九九〇年 筑摩書房

その他 (国立国会図書館デジタルコレクション) (平安遺文フルテキストデータベース) (撰関期古記録データベース) (鎌倉期遺文フルテキストデータベース) (日本文学 MOE 図書館 (和歌&俳諧ライブラリー) (株) 古典ライブラリー) などを使用した。

(たなか みえこ / 本学大学院修了生)